



カリフォルニア州 San Luis Obispo 近郊の  
キャンプ地にて～友人たちと朝食  
(左から2人目が筆者)

見えること」を紹介し、「だから日本は駄目なんだ」と評する傾向が強かった。「自己主張」などは当時アメリカを意識し日本でもはやされた良い例である。しかし、その結果、今日日本で得られたものは社会や共同体への責任を忘れ、社会とのコミュニケーションを無視した「自分勝手」という甘えの横行である。個人が社会への責任を果たすという枠、ルールの上に立脚したアメリカの「自己主張」文化であることを見極めていなかったがゆえの失敗であろう。コミュニケーションがない限り、真実を知ることとはできない。十分に真剣なコミュニケーションを通じて、うわべだけでなくその社会・文化が築き上げられた背景を学ぶことができ、そこで初めて私たちも日本社会や文化の良さを確認することになり、何を世界から取り入れ、何を日本から世界へ発信

すべきかが見えてくるのではないだろうか。  
**▶マルチ・カルチュラルな環境の中で**

私は帰国後、リコーの研究開発部門で無線通信の研究に取り組んだ後、一九九九年に転職。現在ノキア・コーポレーションの研究開発部門であるノキア・リサーチセンター日本研究所に勤務し、無線通信研究グループのマネージメントに取り組んでいる。ノキアは人口わずか五二〇万人のフィンランドの会社であるがゆえに、世界中に拠点を持ち、さまざまな国の人々がグローバルに協力し合いながら研究開発に取り組んでいる。このようなマルチ・カルチュラルな仕事環境の中で、文化や人を知るという努力に立脚したコミュニケーションの大切さを今再び実感している。文化の異なる人や社会と同じ合うことは容易なことではない。しかし、基本はコミュニケーションである。粘り強く相手を知ろうとする姿勢でコミュニケーションを続ける努力しか方法はない。グローバル企業の中で、コミュニケーションの大切さを感じつつ、他文化の良さを取り入れながら、かつ日本の良さや強さを発信すべく仕事に取り組む毎日である。

一七年前の留学経験がなければ今の自分  
はなかったと思う。貴重な機会を与えてくれた国際文化交流財団とリコーの方々  
に深く感謝している。

## 正論

### 元朝鮮総督府幹部が語る「創氏改名」の真相

坪井幸生／大師堂経慰／杉本幹夫／石川水穂

過去を捨てられなかった韓国大統領 黒田勝弘

田中外務審議官が北に媚びる理由 平沢勝栄

おいしい男、おいしい女とは 佐藤勝巳

またしても怪文書「拉致事件に旧社会党員関与」追跡2弾！ 久世光彦

日本のメディアを支配する“隠れマルクス主義”とは 仁上妃芽

北朝鮮との「対話」という幻想 田中英道

旅行者にも分かる金王朝の嘘とデタラメ 名越二荒之助

●電話で/0120-34-4646  
●FAXで/03-3241-4281

8 月号  
定価680円  
(税込み)

お問合わせは  
産経新聞社へ

またしても怪文書「拉致事件に旧社会党員関与」追跡2弾！

日本のメディアを支配する“隠れマルクス主義”とは

北朝鮮との「対話」という幻想

旅行者にも分かる金王朝の嘘とデタラメ

名越二荒之助

# 基本は

# コミュニケーション

一九八八年慶応義塾大学大学院理工学研究科博士課程了。工学博士。八六年より二年間カリフォルニア大学サンタバーバラ校に訪問研究員として留学。帰国後、リコー研究開発本部情報通信研究所に勤務。九九年よりノキア・ジャパン、ノキア・リサーチセンターに転じ、無線通信の研究開発に従事。

カリフォルニア大学サンタバーバラ校の訪問研究員として青い空と海に囲まれたきれいなキャンパスで二年間を過ごした。当時私は慶応義塾大学博士課程の学生であったが、リコーの社員として国際文化教育交流財団の奨学金をいただきつつ、カリフォルニア大学で研究を続けるという幸運に恵まれた。幸運の一方でそれは私にとって一つの賭けでもあった。慣れ親しんだ研究環境から離れ、日常会話もままならない全く新しい環境に飛び込み、二年という限られた期間で博士論文を仕上げる必要があったからである。こんな状況で私を助けてくれたのは、研究室の同僚たちであった。決して外交的とは言えない私に積極的になほり強く接してくれ、背景となる日本文化を知り、コミュニケーションを図ろうと努力をしてくれた。私もより良いコミュニケーションができるようになりたい一心で、英語



中川義克

なかがわ よしかつ

ノキア・ジャパン ノキア・リサーチセンター  
シニア・リサーチマネージャー

漬けの生活に身をおく努力をした。そして自然と友人が使う言葉や話し方に自分自身の英語が似るようになっていた。まさに「学ぶことはまねることから始まる」である。サンタバーバラのかつての同僚たちには今でも感謝の念が絶えない。

## 学生と教授のインタラクションの多いアメリカの大学

アメリカの大学で印象深かったのは講義や研究室での学生と教授とのインタラクションの多さであった。率直で活発なコミュニケーションがそこにあつた。また研究活動についても日本の大学とは非常に異なるシステムがあつた。特に大学院の学生が研究をしながら生活費を賄うに十分な給料が得られるという仕組みは、まだ学生でもあつた私にとって大変な魅力であつた。一方で教授は一経営者的な位置付けにあり、公

●国際文化教育交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三〇カ国の大学・大学院へ一五四名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三五カ国四二九名の外国人留学生への奨学金の供与や講演会等を実施してきている。

的研究基金や企業から共同研究費を得るべく奔走せねばならない訳ではあるが……。おそらくこのようなアメリカの大学の良さは今現在でも日本の大学が見習うべき点であらう。

## うわべしか見ていない日本人

留学生生活を通じて多くのことを学んだが、特に社会におけるコミュニケーションの大切さについて知りえた点は大きかったと思う。友人、同僚たちとは単に研究に関わる技術的なディスカッションだけでなく、自分たちの今後の進路のことや悩み事の相談、アメリカ社会や日本社会の問題点など人生や社会に関わる内容を真剣に話し合うことも度々であった。このような心が通じ合うコミュニケーションを通じて、日本のマスコミでは報道されないアメリカ社会のさまざまな背景を知ることができ、いかに私たちがアメリカ社会そのものを知ろうとせず、うわべの事柄のみしか知りえていないかを痛感した。当時日本ではその国の社会的な背景を見ることなく、日本社会にとって「良く